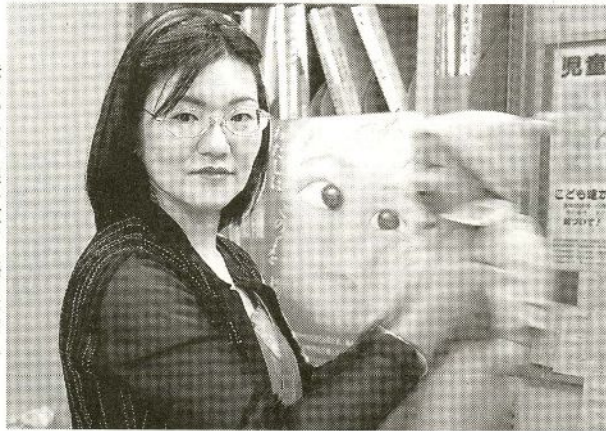


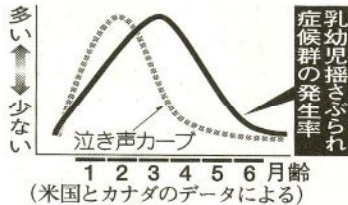
乳幼児「症候群」に注意

強い揺さぶり 脳に損傷

赤ちゃんは泣くことでしか意思表示できない。抱き締めなければならぬのに、泣き声に怒って激しく揺さぶると赤ちゃんは泣きやむ。養育者の揺さぶる暴力が徐々に増していく。その結果「乳幼児揺さぶられ症候群」が発生し、死亡や後遺症の悲劇が起きる。「典型的な児童虐待」と小児科医らは警告している。



赤ちゃんの人形を激しく揺さぶって、乳幼児揺さぶられ症候群発症の仕組みを説明する小児科医師の山田さん



乳幼児揺さぶられ症候群は、赤ちゃんの頭を激しく揺さぶることと起こる。小児科医師で特定非営利活動法人(NPO法人)「子ども虐待ネグレクト防止ネットワーク」(神奈川県伊勢原市)理事長

「泣きやませたい」と暴力化

の山田不二子さんは乳児の人形を揺さぶってその仕組みを説明した。

「揺さぶると未発達な赤ちゃんの軟らかい脳に強い衝撃力が加わり、脳が損傷していく。殺意や悪意はないが、『泣きやませたい』という思いが高じて暴力

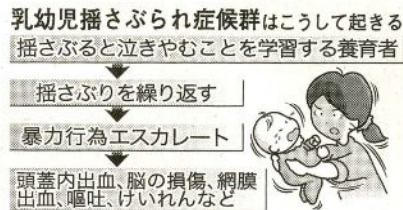
お星も石窯パン! タカキベーカーリー

化する。日常の育児の場で発生し、誰でも加害者になりうる」

2歳未満が大半

被害者は2歳未満が大半。重症だと、揺さぶられた直後から嘔吐やけいれんを起こし、意識障害を伴う。欧米

の調査では死亡率が四分の一、重い後遺症が三分の一。一瞬に子の



将来が暗転する。

きつかけは泣き声が最も多く、トイレを使う訓練やいたすらなどにイライラ感が高じる場合に起きやすい。米国やカナダのデータを分析すると、乳児の泣き声と揺さぶられ症候群発生率のカーブが一致してほぼ重なり、関連がうかがえる。軽症だと、無気力でぐったりしていて風邪と誤診されたりする。外傷は少ない。頭蓋内出血や脳の浮腫、網膜出血などが症状で、脳CTや眼底検査は診断に欠かせない。

養育者が揺さぶりを認めない場合がほとんどなのも診断を難しくしている。「高い高い」「ひざ上でピョンピョン」といったあやしや転倒・落下事故などの言い訳が目立つ。これを受け入れる見方もあったが、「通常のあやし方や悪ふざけでは起さない」と山田さん。

父親が生後五カ月の長男を揺さぶって脳出血で死なせる事件が昨年、横浜市であった。傷害致死罪に問われた父は「あやしによる事故死」と主張したが、横浜地裁は今年一月に実刑判決を言い渡した。被告が否認したケースで、揺さぶられ症候群が「暴行による」と虐待を認定した初の判決として注目されている。

米国の調査結果を基に山田さんは「乳幼児揺さぶられ症候群は全国で年約二百人、死亡は五十人ぐらいではないか」とみる。厚生労働科学研究班で実態調査を計画 중이다。

揺さぶられ症候群で虐待が疑われ、刑事裁判になったのはこれまでわずか数例。大半は見逃されている。診断した医師は子の安全を確保するため児童相談所に通告する必要がある、死亡例は警察に届ける義務がある。

横浜で実刑判決

予防へ妊婦教育

全国七病院で昨年から揺さぶられ症候群の予防活動が始まった。妊婦学級や両親教室で看護師らが揺さぶりの危険性を訴え、乳児が泣く時の対処法を教えている。親からは「揺さぶりの危険が分かった」と好評という。

山田さんは「妊婦健診などの際、乳児の泣き声への対処法を教えたい」と提言している。